

公家町の遊び

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

京都御所東方の公家町の調査で、1,000点あまりの土人形やミニチュアの玩具が出土しています。その一部を、昨年5月からの当資料館特別展示『公家町を掘る』や今年の『公家町の暮らし』で展示しています。

土人形・玩具と呼ばれるこれらの品々は、「子供の…」とか「ままごとの…」で始まって「…おもちゃ」で結ばれることにはなりますが、陳列品には、その枠に収まりそうにないものが多々見られます。

太公望のこと 紀元前10世紀頃の古代中国で、殷から周への政変を実現した中心人物に呂尚がいます。呂尚は渭水のほとりで釣り糸を垂れているところを周の文王に見い出されます。周の太公である文王が望んだ人ということから太公望と呼ばれ、釣師の異称にもなっています。

頭に笠をかぶり、蓑をまとった座像は、右手のところに2mmほどの孔があげられています。今一つ、釣りをする童の像があります。左手を胸の前に、右手を腰の後に引いて片膝を立てた形で、両手に孔があげられています。この2体の人形は、それ自体では完結しておらず、あげられている孔に、釣竿を取付けることで、まさに太公望の姿にできあがります。こうなり



太公望の人形と盆景

ますと、竿には釣り糸が必要です。置くべき場所には川沼・池、石や岩といった情景がいりますし、水中には魚も必要です。そうしてできあがったのが、丸盆にセットした写真です。ミニチュアの土人形を使った、一種の盆景ですが、江戸時代のお公家さんやお姫さんの遊びの一つになっていたのではないのでしょうか。床や棚の飾りとしても使えそうです。

茶臼のこと 径8.5cmの茶臼の上に、人形が腰を下ろしているものです。臼は上下がわかれていて、

回転のための心棒が取付けられるように穴があげられています。人形と把手は上白に貼り付けて焼き上げられています。茶臼は、上下ともに赤い粘土を、人形と把手は白い粘土を使って仕上げられています。



茶臼と人形

ます。赤と白の粘土を使い分けた焼物としては、桃山陶器の^{なるみ}鳴海織部が有名ですが、京都の土人形の生産にも、そういった、意図や技術が用いられていたことを示す好例と言えるでしょう。

人・動物・魚・神様などいろいろな土人形が、赤・白・肌色の土で作られています。素焼きのものから、緑色の釉薬をかけた物、焼して黒色に仕上げたものなど、焼き方にも様々な方法が用いられていたことがわかります。

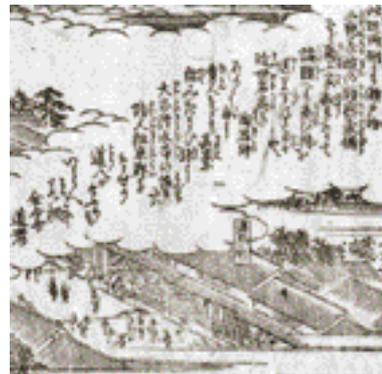
食器のこと ミニチュアの玩具には食器や容器などがあります。小さいものは1cm程度から、大きなものでも6cm程度の大きさです。

製品としての仕上がりを見ると、形や絵付けから焼き上げまで、まさに完成されていて、京焼の茶碗・急須や伊万里の碗などが、形が小さいだけで京焼・伊万里その

ものとして作られています。このことは、ミニチュアの玩具の生産者が別にいるのではなく、それぞれの焼物の産地の職人が、通常の焼物と同じようにしてミニチュアの焼物を作っていたことがうかがえます。

桃の節句の^{ひな}雛飾りのなかには、生活用具のほぼ一式をミニチュアで作って飾られているものがあります。ただ飾るだけでなく、雛飾りの食器にあわせた小さな料理を盛って食事し、小さな茶碗で抹茶を点てて楽しむといった節句の行事が、京都には、今も残されているそうです。出土したミニチュアの品々も、そういったことに使われていたのでしょう。

五条坂のこと 『^{さいぜん}再撰 花洛名勝図絵』(1864年)五条坂陶器店には、「此辺両側とも瀬戸物土瓶茶碗の類或は^{つちてく}土木偶など商家数多

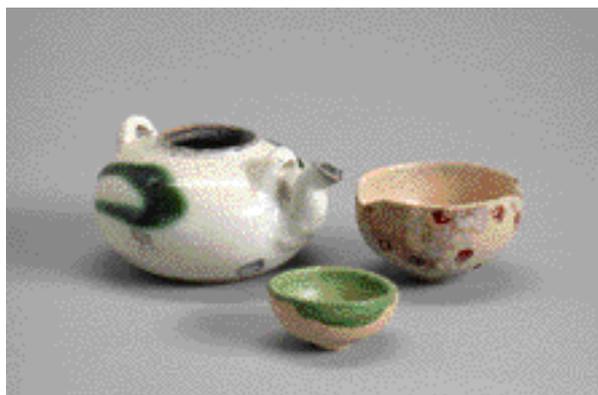


絵図の中の五条坂陶器店

ありて...」として京焼を代表する1人である清風家の隣の店に、並べられた人形を描いています。同絵図では、高名な陶器師の家に貴人も訪れるとしていますから、出土品の中には、伏見・清水などの店で買われたものだけでなく、有名な焼物師に依頼した注文品などもあるかもしれません。

「子供の」ではなく、「大人も」暮らしの中で様々な楽しんだ玩具として、見ていければと思います。

(原山 充志)



土人形とさまざまなミニチュアの食器